

わが内なる自画像

萬鉄五郎 七変化 展

2013年11月30日(土)～2014年2月23日(日)

日本近代絵画の先駆者として知られる萬鉄五郎は数多くの自画像を描きました。それらが描かれたのは、大きく2つの時期に集約されます。まずは美術学校卒業前後に描かれた作品群。そして郷里・土沢で制作に没頭した大正3年から5年にかけて描かれた自画像群です。

様々な造形思考の実験のもとに描かれた萬の自画像には、異様ともいえる一種独特な「顔」があらわれます。本展では、油彩作品のほか素描もあわせ、その制作のプロセスを探るとともに、隠された思いに迫ります。

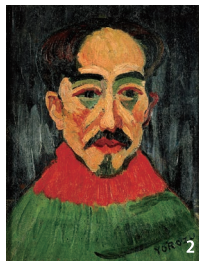


【休館日】月曜日(祝日の場合はその翌日)、12/29-1/3

【開館時間】8:30～17:00(入館は16:30まで)

【入館料】一般600円、高校・大学生350円、小・中学生250円 *20名以上の団体各50円引

- 1.《赤い目の自画像》油彩・画布 1913年頃 岩手県立美術館
- 2.《赤マントの自画像》油彩・画布 1912年 個人蔵
- 3.《自画像》油彩・画布 1915年頃 岩手県立美術館



IWATE MODERN ART 具象表現の系譜 展

2014年3月4日(火)～4月13日(日)

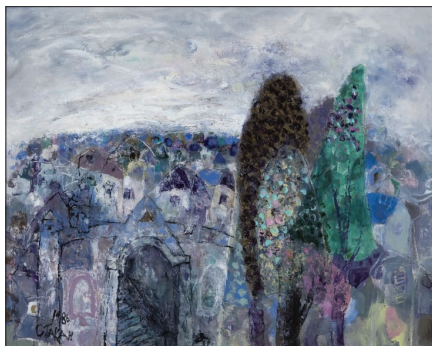
今年、萬鉄五郎記念美術館は30周年を迎えます。30年の成果として、収蔵品の中から具象表現に焦点をあて、岩手の近代美術の歩みを紹介します。

【出展作家】

海野三岳、田中貞三、真山孝治、及川呉郎、五味清吉、及川文吾、寺島貞志、高橋忠弥、松本峻介、舟越保武、奈知安太郎、澤田哲郎、海野 経、吉田清志、橋本八百二、舞田次雄、高原栄人、大宮政郎、浅沼弘、橋本 正、池田次男、藤井 勉、豊川和子、欠畑美奈子、重石晃子、木村 正、伊藤昌男、畠山孝一、田村史郎、佐藤祐司

【休館日】月曜日(祝日の場合はその翌日)

【入館料】一般400円、高校・大学生250円、小・中学生150円 *20名以上の団体各50円引



高橋忠弥《ピオットI》 油彩・画布 1986年

街かど美術館 アート@つちざわ〈土澤〉

2014年10月11日(土)～11月9日(日)

会場／花巻市東和町土沢地区&東晴山地区(商店街の店舗や空地、生活空間など50ヶ所を予定)

募集内容／次のいずれかの条件を満たす展示プランを募集します。

- ① 展示空間の魅力や特性を活かした作品
- ② 地域性にアプローチした作品
- ③ 住民とのコミュニケーションを意識した作品

募集人数／40名(組) *審査のうえ出展作家を決定します。

応募メット／2014年2月28日(金) 17時必着

問合せ／花巻市東和町土沢8-115 こっばら土澤102号 土澤芸術商店ぷると内 事務局

tel.0198-29-5959 E-mail : purupurupult@gmail.com <http://www.arttsuchizawa.com/>

参加募集!

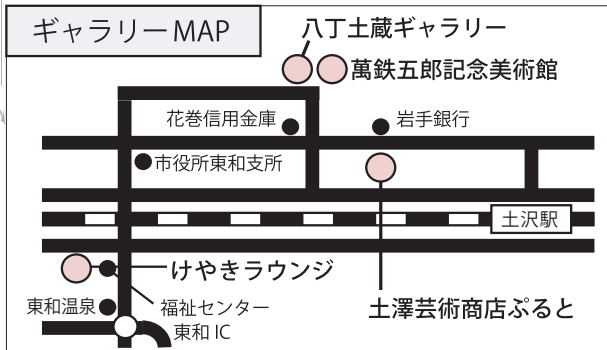
喫茶「八丁土蔵」

萬鉄五郎の自家「八丁」にあった土蔵を移築復元した、ギャラリーと喫茶スペースです。自慢のオリジナルコーヒー「蔵」「八丁」を、ぜひ一度ご賞味ください。 営業時間：10:00～16:00(10:15:30)



美術の街「土沢」 ギャラリー情報

萬鉄五郎記念美術館とあわせて、「美術の街」土沢めぐりをしてみてはいかがでしょうか。



萬鉄五郎記念美術館

八丁土蔵ギャラリー

花巻市東和町土沢 5-135 萬鉄五郎記念美術館内

9:00-16:30 月曜休 (祝日は翌日) 入場無料

iwate コンテンポラリーアート

宮沢賢治没後80年記念 雨ニモマケズ イーハトーヴの四季

松埜青樹 —宮沢賢治の世界— 展

開催中～4月13日(日)

宮沢賢治の童話や詩の世界を描いた作品。



Gallery Space けやきラウンジ

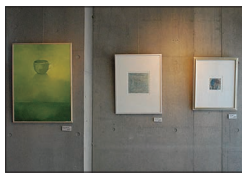
花巻市東和町安俵6-90 東和図書館内 tel.0198-42-3205

10:30～19:00 (最終日は16:00まで) 入場無料

けやきの会コレクションⅡ展

2月1日(土)
～2月28日(金)

会員秘蔵の小品展



似内顕也 展

3月1日(土)
～3月31日(月)

絵画展。花巻の美術運動の軸的存在。



土澤芸術商店ぷると

花巻市東和町土沢8-115 こっぼら土澤内 tel.0198-29-5959

11:00～17:00 日曜定休 入場無料

ぷると常設展 「版画を中心に」

2月3日(月)
～2月13日(木)

版画をメインに所蔵品をセレクト



木部一樹 展

2月17日(月)
～2月27日(木)

自然派の画家、木部氏の野鳥の世界



1912年とは

1912年3月、萬鉄五郎は東京美術学校を卒業。卒業制作として『自画像』『裸体美人』を発表したが、後期印象派などの影響を受けた激しい画面は物議をかもし学校側の評価は低かった。しかし萬の「己の心に忠実に」と描いた自我を解放した作品は、萬芸術の出発点で、日本近代美術の新しい幕開けを告げるものである。

この『自画像』は、光あふれる明るい色彩を背景に、頭髮や胸などに思い切りよく「赤」など入れているが、その後の繰り返し描く自画像に比べると、まだ穏やかな表現となっている。「自分とはなにか」を問うために描く自画像は画家にとって、身近なモデルとしてラジカルな造形探求のモチーフになりうる。引き続き描いた『雲のある自画像』『赤い眼の自画像』の強烈な色彩や荒々しいスピード感のある描線など、

さまざまな様式を描く実験場として自画像は最適であった。他人の顔ではそうはいかない。北欧の孤独な魂を描いたノルウェーの画家ムンクの『叫び』（1893年）は、夕暮れのフィヨルド海岸を歩いていたとき、その実体験から生まれた幻覚に基づいて描かれたムンク自身の不安な「自画像」である。

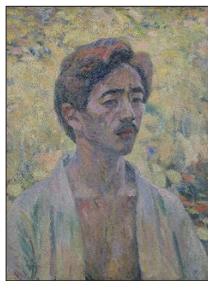
一方、萬と同じ27歳の石川啄木は新詩壇の天才と将来を囑望されたが、1912年4月13日、東京小石川久堅町で亡くなった。啄木は1886年2月20日生まれ、萬は前年の11月17日に生まれているので、萬が3ヵ月年長であった。同じ27歳の二人、萬は自分の芸術を開花させる出発の年になったが、早熟な啄木は人生の終焉を迎えた。

そして、近代美術の魅力を高めたもう一人の画家松本竣介（旧姓佐藤）が、この年の4月19日に盛岡出身の佐藤勝身の次男として東京に生まれた。2歳で父のりんご酒醸造の事業に参加のため花巻に移り、小学校3年まで過ごした。その頃、父のもとに盛岡高等農林学校を卒業した宮沢賢治が訪れ交流が

あったという。それから父が貯蓄銀行の創立参加のため、一家は盛岡に移り盛岡中学に入学した。竣介は画家になってから発行した月刊誌『雑記帳』（1936年）の創刊号巻頭に宮沢賢治の遺稿をのせ、賢治への敬愛の深さを示している。

宮沢賢治は、この年が16歳で盛岡中学の4年生であった。3年生のとき最初の短歌をつくり、啄木流の「わかち書き」を試みている（『歌稿B』）。10年先輩の啄木の『一握の砂』（1910年12月）を読み、その刺激を受けて短歌を制作して文学への一歩を踏み出した。「1912年」は明治45年、7月30日から大正元年になるが、単に元号が変わっただけでなく、岩手の「芸術文化」にとって特筆される年であった。

萬鉄五郎記念美術館長 中村光紀



萬鉄五郎《自画像》
油彩・画布 1912年頃
東京芸術大学蔵